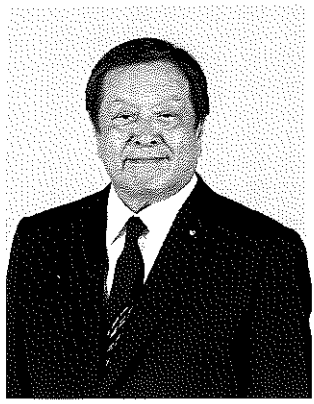
御挨拶

防衛大臣　浜田　靖一



防衛大臣の浜田靖一です。

偕行社会員の皆様、御家族の皆様におかれては、常日頃から防衛省・自衛隊の架け橋として、一方ならぬ御支援・御協力を賜りまして、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

昨年8月、二度目の防衛大臣を拝命してから今日に至るまで全身全霊で職務に取り組んでまいりました。

本日は、今の私の率直な思いを申し上げ、御挨拶に代えさせていただきたいと思います。

国際社会は今、戦後最大の試練の時を迎えています。

昨年2月から続くロシアのウクライナ侵略は、国連安保理の常任理事国が、国際法を無視して主権国家を侵略し、核兵器による威嚇ともとれる言動を繰り返すという前代未聞の事態です。

また、中国は、核・ミサイル戦力を含め軍事力の質・量を急速に強化させるとともに、東シナ海、南シナ海において、力による一方的な現状変更やその試みを推し進めています。そして、北朝鮮は、昨年から立て続けにミサイル発射を繰り返すなど、核・ミサイル開発を急速に進展させています。

危機管理の要諦は、常に最悪を想定することであり、防衛省・自衛隊は、あらゆる事態に迅速に対応することが求められます。

そのために、我々は、我が国の安全を確保する最終的な担保である防衛力を常に磨き続けなければなりません。

昨年12月、新しい国家安全保障戦略、国家防衛戦略、防衛力整備計画を閣議決定しました。

具体的には、スタンド・オフ防衛能力や無人アセット防衛能力等、将来の防衛力の中核となる分野の強化、現有装備品を最大限活用するため、可動率の向上や弾薬の確保、主要な防衛施設の強靱化への投資の加速といった点を重視しつつ、防衛生産・技術基盤や人的基盤の強化などにも、しっかりと取り組んでいくものとなっています。

私としては、現下の厳しい安全保障環境に対応していくために必要な防衛力の抜本的強化を実現し、真に国民を守り抜く体制を作り上げる戦後の防衛政策の転換点となる戦略文書ができたと考えています。

しかし、防衛省・自衛隊としての取組みは、戦略文書の策定で終わりではなく、まさにスタートラインに立ったにすぎません。

防衛省・自衛隊は、日本国と日本国民を守る「最後の砦」です。

有事の際に、しっかりと国を守る、国を守るために戦える、そういう防衛省・自衛隊でなければなりません。正面装備だけでなく、部品や弾薬、その補給、整備、輸送、防衛産業や将来を担う人材の確保等、あらゆる部分に目を配り、不十分なものがあれば、それをきちんと埋めていく、その努力を引き続き、私が先頭に立って確実に進めてまいります。

ただ、皆様も御承知のとおり、一国で出来ることには限界があります。それは我が国も同様です。そうした中で、同盟国等との安全保障協力・連携は非常に重要です。

我が国が位置するインド太平洋地域は世界の活力の中核であると同時に、グローバルなパワーバランスの変化の渦中にあり、その重要性は増すばかりです。

特に、我が国唯一の同盟国であるアメリカとの関係は、我が国の安全保障の基軸です。オースティン国防長官と私は、昨年9月、そして本年年初の二度、対面で日米防衛相会談を実施するなど、連携を深めています。

今後も、日米安全保障条約、日米ガイドラインに基づいて、共同訓練、米軍の艦艇・航空機の防護、装備品の共同研究・開発など、引き続き様々な分野において両国の協力を進展させてまいります。

同時に、基地負担の軽減にも取り組みます。特に沖縄については、基地の負担軽減を目に見える形で実現するという政府の取組について、引

き続き丁寧な説明を行い、普天間飛行場の一日も早い移設・返還などに全力を尽くしていきます。

そしてアメリカ以外の諸外国、とりわけ、民主主義や法の支配といった基本的価値や安全保障上の利益を共有する多くの国々との二国間、多国間での協力の強化も、我が国の安全保障にとって不可欠です。

引き続き、「自由で開かれたインド太平洋」というビジョンを踏まえ、地域の特性や相手国の実情を考慮しながら、このビジョンに賛同する全ての国との協力を進めていく考えです。

我が国は平和国家としての歩みを一歩一歩重ねる中で、自由や民主主義、法の支配、基本的人権の尊重といった普遍的価値の旗を堂々と翻しています。志を同じくする仲間としっかりと手を携え、秩序を変えようとするものに対しては、断固として反対していかなければなりません。

防衛省・自衛隊は、これからも、そして、いつ如何なるときも、国防の最前線で真摯に任務に励み、我が国及び国民の命と平和な暮らし、そして我が国の領土、領海、領空を断固として守り抜いてまいります。

私も、防衛大臣として、全国25万人の自衛隊員の先頭に立って、我が国と世界の平和と安定のために全力を尽くす所存です。

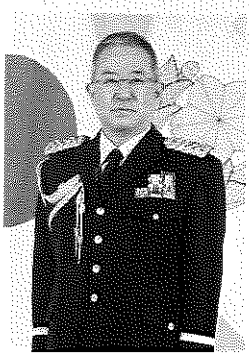
長年、我が国の防衛に関する様々なご活動に取り組んでこられた偕行社の皆様におかれましては、なお一層の御支援と御協力を賜われれば幸いです。

最後に、偕行社の今後益々の御隆盛と、会員並びに御家族の皆様の益々の御健勝と御多幸を、心より祈念し、私の御挨拶とさせていただきます。

令和5年　年頭の辞

～防衛力強化「実行元年」の決意～

陸上幕僚長
吉田　圭秀



新年、明けましておめでとうございます。平素より陸上自衛隊に対する深いご理解とご厚情を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年を振り返ると、「戦」の一字に象徴される、ロシアによるウクライナへの軍事侵略の衝撃は計り知れません。このロシアの蛮行により、米ソ冷戦後約三十年間続いた「ポスト冷戦」という暫定期が完全に終焉し、多極化した国際社会において米中の戦略的競争を主軸として力による現状変更を試みる勢力と法の支配に基づく国際秩序の維持を求める勢力とがせめぎ合う、極めて複雑かつ不確実な時代に突入したと認識しています。我が国は、その「最前線」に位置しています。

こうした極めて厳しい安全保障環境の下、昨年末、新たな「国家安全保障戦略」、「国家防衛戦略」及び「防衛力整備計画」が策定され、過去に例を見ない多額の防衛予算が配分されることとなりました。もとより、我が国の防衛力は、戦略が策定され、予算が付与されれば、自動的に出来上がるものではありません。我々は速やかに、新たな組織や装備を部隊に実装し、人材を育成し、訓練により練度を向上させ、運用態勢を確立する必要があります。我々自衛隊は、戦略・予算を防衛力の血肉に変え、今後四半世紀、我が国への軍事侵攻を許さない結果を出すことが求められるという、極めて重い責務を担ったと感じています。

一方、これまでにない「危機」は、これまでにない「機会」を生み出しています。陸軍種において、ここ数年、日米共同訓練の質が幾何級数的に向上するとともに、昨年一年間でも、日米比の三国間協力やインドネシアにおける多国間訓練等、同盟国米国に加え、豪州やASEAN、欧州諸国等の同志国が結集する強いベクトルが働いています。今年も、陸上自衛隊は、この流れを益々太くしていく所存です。

陸上自衛隊は、防衛力強化「実行元年」の強い思いで本年の隊務に邁進することをお誓い申し上げますとともに、皆様にとって心穏やかな一年になるよう心からお祈り申し上げ、ご挨拶と致します。